

オトコ前な人が
好き



キャンディやぶこ

好きな人にたまたま家庭があっただけってそんな言葉どこかで聞きましたね

「何階ですか？」

「えっ・・・あ・・・あの・・・5階です・・・」

エレベーターで

たまたま

一緒になった

男性。

私のななめ背後から

頭上を通して腕を伸ばし、

エレベーターの5のボタンと

3のボタンを押した。

一瞬男性の袖口の先が

おでこをかすめ、

ドキッとした。

『この人・・・3階で降りるんだ』

横顔を見て

再びドキッとした。

うわ・・・

久々に見た。

昭和の男前。

鼻筋通ってる。

こんな
男前という
言葉が似合う男前な人、

イマドキ
そうそういないよね。

イケメンではダメ。

男前。

男前という言葉には
顔だけではない、

男気のある
芯の通った
包容力を感じる。

イケメンじゃなくて男前

『さっきのあの人・・・

少なくとも同じ会社にいる、ってことだよな～・・・

どこの部署なんだろう？』

私は
初めて出会ったばかりの
男前な人を思い浮かべていた。

一昔前の寿司職人のような
潔い雰囲気。

しかし私はいつまでも
そんなことばかり考えてる暇はなく、

また仕事の波にのまれていった。

そんなある日。。

社内のパソコン講座があった。

windows 7 の簡単な説明と

エクセル中級講座が
あるらしい。

ま・・・とりあえずいっとう。

いろいろ不安な点もあるし。

と

気軽な気持ちで参加した。

6Fにある会議室。

30人くらい集まってる。

前方にはスクリーンが下げられてる。

「では前回の続きを・・・」

いきなり講師担当と思われる方が
話し出した。

たぶんパソコンが得意なんだろう。

それに、前回って何？

前回知らなかったよ～

教えてくれてないやん、あの部長～

私がポカだったのか？

いや、そんなこと言ってるばあいじゃない。

参加してないよ。

追いつけないんじゃない？

私は早くも焦りモードになった。

講師担当とおっしゃるハタケヤマさん。

スクリーンに問題を

たくさん映し出した。

えっ？・・・何これ・・・

「各自この問題がパソコンに入ってると思うので出してくれますか」

出ないけど・・・

再び焦りだす。

あ、あの・・・出ないんですけど・・・

脂汗をかき始めた
私の横に

「どうしました？」

あ・・・あの・・・男前な方。。

「もう一度やってみますね」

電源抜いて再度立ち上げてくれた。

うわ・・・ちょっとドキドキする。

この間のエレベーターより
一瞬至近距離になったよ。

都心にあるタワーズマンション。

35年ローンで
買った夫婦名義。

オートロックと
大理石のエントランスに
憧れて購入した。

でも実際は、

帰りに寄って買って帰った
ネギがはみ出た
スーパーの
袋をカシャカシャいわせながら
エレベーターを上がったりして
ほんと所帯じみてる。

エレベーターで
一緒になった

別の階の
老婦人が

「今お帰りですか。お仕事大変ですね。

今からご飯作るんじゃないでしょう」

と声をかけてくれ、
曖昧に微笑んで返した。

ドアをあけて中に入る。

朝、家を出た時の状態のままの
テーブルの上に
疲れがドツと出る。

まず、これを片付けてからじゃないと
夕飯の支度もできない。

なんでトースト食べたお皿くらい
キッチンにもっていけないんだろう。

4つ年上の夫は私より30分あとに
出勤する。

いつも食べたものは
流しにもっていっておいてね、と
あれだけいっても
やっぱりできない。

結婚生活12年で
できないんだから、
この先もずっとできないんだろう。

そのことを
考えただけで
再び疲れが襲ってくる。

12年か・・・
干支一回りしてしまったな・・・

洗濯物を取り込みながら
ふと脳裏をよぎる。

子供もできなかった。

結婚後3年くらいまでは
私も基礎体温つけたり
ずいぶん頑張ったけど、
段々あきらめモードになってしまった。

病院に行こうかと
考えたこともあったけど、

そこまでする必要ないんじゃないか、
自然にまかせようと
いう彼の言葉にながされてるうち
月日が流れてしまった。

あの時、やっぱり
思い切って
私だけでも病院に行けばよかった・・・

そんな後悔と
いや、このままでよかったんだ、という
ほんの少しの
現状を肯定する気持ちが
揺らめいた。

嵐の前の静けさ

夜も8時を過ぎてから

ようやく世帯主帰宅。

やっと夕食だけど

夕食の間中一言も会話がなない。

ご飯時に

テレビをつけてはいけない、というのは

彼の幼いころからの

しつけ教育によるものだけど、

いまどき会話もないなんて

時代錯誤じゃね？

というか、

会話をしてはいけない、というのではなく

会話がなない私たち、というほうが正解。

どうしてこうなっただらう？いつから？

すこしづつすこしづつ

なんてことはなない

ボタンの掛け違いいから

はじまって

長年の蓄積でずれてきたんだらうな～

今や見えない活断層が

形成されてる。

いつ、それが

火の粉をあげるんだらう。

それとも
静まり返った沼のように
音もなく
水はねのひとつもなく
永遠に人の訪れることもないまま

私は一生を終えるのだろうか。

夜はダブルベッドで一人眠る。

新婚当初はもちろん二人で寝たのに
いつから一人で寝るようになったんだろ。

ある日

「やっぱ布団がいいわ」といって
和室に布団を敷きだした彼。

その時は

そうなんだ・・長年布団で寝る生活をしてたから
そっちのほうに慣れてるんだ、とか
仕事で疲れてるんだ・・など
おもってずいぶんめでたい女だったけど
その数ヵ月後に
浮気が発覚した。

夫婦が寝室別にする、ってというのは
良くない兆候だ、ということは
あとから知った。
なんとしてでも
寝室は同室にしなければいけないらしい。

でも、そうはいっても
もう今更同じベッドで寝る気もおきなくなってきた。

だけど、
一人では広すぎるダブルベッド。
それに
心と体は反比例。
私のこの女ざかりの燃えさかる
肉体の熱い思いを
どう処理したらいいか、

時々眠れないときがあった。

会社では

2回目のパソコン講座があった。

「また、会えるかな・・・」

そう大した

大企業でもないのに

あれっきり

あのオトコマエな人とは

会えないでいた。

あれは幻だったのだろうか・・・？

いや、でも

確かに同じ会社の人であった。。

講座担当は今日もハタケヤマ氏。

V LOOKUPとか

H LOOKUPとか

例のごとく

スクリーンに画面を映し出しながら

説明してくれる。。が・・・

はあ～？

何の世界～？

簡単な説明受けて、いや
もっと詳しく教えてもらいたいと
思う私には簡単な説明としか思えず、

「ではまた問題やってください」と
サラッといわれる。

うむう～・・・

しばし考えたフリをしても
よくわからず。。

てもちぶさたになり
キョロキョロしていると・・・

いた！！
オトコマエ氏。

ギャル二人に手ほどきして
何やら教えてる風。

ギャルっていまどき、
死語だろうけど
どう見たって私より若い。

そうゆう場合はなんと
位置づけすべきか。

ギャル2人(死語)
「あ～そうなんですか～・・・」
っと
はねるようにうれしそうに
喜んでる。

私も教えてもらいたい・・・

そして、そのあと

「あ～そうなんですか～・・・」と
喜んで見せようか。

・・・似合わない・・・か。

アラサー女はなんて言うのか妥当だろうか。

教えてももらってないのに、
すでに教えてもらった後のリアクションを
考えもがく私。

く～！！

一人悩んでると

「どうしました？」

男前氏が
声をかけてくれた。

いけない恋

あ！

彼だ… やっぱオトコマエだな～鼻筋通ってるのは
男前の必須条件。

数十年ぶりに出会った 元祖男マエに
私は見惚れていた。

いや…しかし… 私の気持ちが もし伝わってしまったら 恥ずかしい。

何故か私って

自分が好きな人のこと 誰にもしゃべってないのに いつのまにか周囲に気付かれてる。 なんで
だろ？ ついつい言動に

にじみ出てしまうのだろうか。

あー 今もつい目で追ってしまった。 イケナイイケナイ…

私の気持ちは

押し隠さねば…

でも ふと気付いた。

どうして 好きって気持ち 隠さないといけないの？

恥ずかしいから？

私が既婚者だから？

既婚者は恋をしてはいけないのだろうか？

一度結婚したら

もう誰とも恋愛できない。 誰も好きになってはいけないのだろうか。

恋したっていいじゃない

恋は一度だけ、
生涯かけてたった一人の人を永遠に愛する。

そんなことができれば
それはそれで理想なんだろうけど、
それって本当に
幸せなこと？

そんな人が世の中にいるかどうかも
怪しいもんだ。

みんなどこかで
自分で自分に
予防線張ったり
枠をはみでないよう、こえないよう
規制してる。
思いっきり
はみ出てる人もいるけど、それが
不幸なのかどうか、というと
またそれも疑問。

はた目からはやっかみもあり
非難されるけど
本人の人生なんだから
それはそれでいい。

恋しようよ、とか
恋はいいもんだよ、とか
世の中は
恋愛を散々宣伝してくれるけど、
もう恋愛戦線から離脱してしまったような

人間には

一抹のさみしさを感じる。

もう、そんなの関係ないよ～と

おばさんぶるのがカッコイイとは思わないけど、

恋したい、恋愛したい！なんて叫ぶトシでもないし、

なんだか世間から白い目で見られるのがコワイ。

何が一体怖いんだろうね。

そんなに世間からまともな人間と

見られたいんだろうか？

貞操なんて

コトバも古いけど、

私は一体何に縛られて

何を恐れてるんだろう。

オトコマエ氏の名前

ふと目を上げると、

プラプラしているIDカードが目に入った。

私の行ってる会社ではセキュリティのため
全社員、
IDカードが義務づけられている。

おかげで首から下げてるそのカードのおかげで
オトコマエ氏の名前がわかった。

「葉本・・・」

ハモト？・・・ヨウモト？・・・

なんだか難しい名前。。なんて読むんだろ。

下の名前は・・・？

私は名札を覗き込んでいることがばれないよう、
最大限にさりげなくを装って
そっと目線だけ横流して見た。

秋慈・・・アキジ？シュウジ？・・・

また難しい名前だな～・・・

輸入販売部・・・

あ～

輸入部だったのか・・・

オトコマエ氏の読み切れなかったが、
名前とそして部署までがわかり
私はちょっと
お近づきになれたような気分になりうれしかった。

そんな思惑とは別に、
パソコン講座は滞りなく終わってしまった。

次回はまた

1ヶ月後。

それまでまた

偶然会えるときがあるだろうか。

ジムでも行こうかな

ライフ&ワークバランスが信条の

私が勤務している会社。

真面目に働く。厳しく指導。優しく接する。

5連休、7連休を率先してとることをすすめている。

慰安旅行もいつも海外。

去年はグアム、その前は韓国だった。

大所帯になるので

部署ごとに日にちをずらしていくのだが、だから

輸入部の方とは今まで接点がなかった。

でも、いろんな部署の方との交流が生まれるよう、

毎年いろんな組み合わせの部署で旅行が計画されるから、

今年はもしかして・・・なんて

私は淡い期待を抱く。



家に帰って夕食の準備をする。

お腹がすいては

ご飯も作れない、と

ご飯作る前にすぐ、何か口にに入れてしまう。

菓子パンかじったり、チョコを一口・・・とか。

これが、ダメなんだよね～・・・

でもさ、

ダンナの帰ってくるのが遅いから、

作ったところですぐに食べるわけじゃないし、

おなかすくんだよね。。

で、夕食も8時以降。

もちろんその夕食も結構食べちゃうし、

そんなこんなの繰り返しでなんだか太ってきたような気がする。

あ～なんかスポーツでもはじめたほうがいいかな～・・・

会社帰りに途中下車しないといけないけど、

スポーツクラブがあったよな・・・
ちょっと見学でも行こうかな。

次の日、軽い気持ちで
寄ってみた。

スポーツクラブなんてゆうところには
生まれて初めて足を踏み入れた。

ちょっとドキドキする。

この間入ってた新聞の折り込み広告。

その隅っこに

「お試しエクササイズ2時間無料」チケットを
にぎりしめた。

エントランスを入ると

なんだかちょっとしたホテルのラウンジのよう。

入会金、3万円。

法人会員50万！！。。て。。

ひょえ＝

受付の頭上に掲げられているボードを見てのけぞった。

なんだか、とんでもないところへきたみたい。

お試し券なんてあるからって、

私場違いじゃ？・・・

「いらっしゃいませ～」

にこやかに受付レディーが対応してくれる。

受付をするために生まれてきたといっても

過言ではないような

1点の曇りもないさわやかな笑顔に

細身だけどスポーツウェアの上からも、

筋肉質が感じられる

スポーツウーマン。

「あ、あの・・・」と

ためらいながら

お試しチケットを差し出す私に

「今日は体験入学ですね！」とにっこりほほ笑む。
簡単なパンフレットを私向きに見せてくれ、館内案内をしてくれた。
「こちらがロッカールーム、こちらが
今日お客様が参加予定のジムになってます。
専任のコーチが、・・・今日は沢本というものがおりますので、
あとで紹介しますね。
ひととおりトレーニング終わりましたら、
サウナとジャグジーも入ってもらって結構ですよ。
今日は水着もってこらてます？」
「いえ。。水着までは・・・ちょっと。。」
「あ、そうですか。では、お手数ですが、簡単にこちらに
お名前とご住所など書いていただけますか？
あ、あとでおいかけて無理なセールスしたり、
強引に入会せまったり。。
なんてしませんからご安心を。」
またまた営業スマイル80%で
手際良くアンケート用紙を渡された。

オトコマエ氏がいた！

受付のおねいさんが
トレーナーの沢本さんを紹介してくれた。

「こちらが今日一日体験の西山夏鈴さんです」

沢本さんはポニーテールに
黒のタンクトップ姿。
一滴の脂肪もない引き締まった背中を
きりりと見せていた。

「こちらでは、
西山さんの目的に合ったメニューを作成します。
体力作りなのか、ダイエットなのか、フルマラソンに出場したいのか。
目標によって、また現在の体重と落とし込みたい体重によって
最適のプランを作って、その都度見直しながら一緒に目標達成を目指します」

ほお〜・・・そうなのか・・・
沢本さんのキビキビした態度に圧倒される私。

「夏鈴さんの目的ってなんでしょう？」
にっこりほほ笑むトレーナー沢本さん。
「あ、あの・・・やっぱ・・・ダイエット・・・かな・・・」
「あ〜そうですか・・・どのくらい目標ですか・・・？」
「え〜と。。10kgくらい・・・とか。。痩せられたら。。と
思いますが・・・」
10kgなんて大きく出てしまって、ちょっと恥ずかしかったが、
それくらい痩せることが出来れば夢のようだ。
「そうですか。。
一緒に頑張りましょう。
じゃあ、、今日ははじめてなので、
とりあえずトレッドミルでもやってみますか？」

といて、
なんだかランニングマシンのようなものの前に
誘導してくれた。

「とりあえず、5分くらい走ってみますか」
恐る恐る
乗ってみた。

なんだか思ったより簡単、というか
普通に走るより楽。

じゃあ次は・・・

と案内されたのがベンチプレスなどが置かれていたところ。

そこで私は目を疑った。

あの、オトコマエ氏・葉本さんが
トレーニングしていたのだ。

えっ・・・？

ハモトさんか、ヨウモトさんか、
いまだにわかんないけど、あのシト・・・
あのお方だわっ！！

あまり凝視するのも失礼かと
しかし、ついつい横流しまなこで
見てしまう私。。

額にうっすら汗をうかべ、
浅黒い肌。
スーツを着てる時はわからなかった
筋肉の盛り上がり・・・

そんな私に葉本さんも
視線を感じたのか、
一瞬私を見た。

でも、私がどこのだれなのか、覚えてくれてるのか否なのか。

その一瞬の表情では読み取れなかった。

「まあ、いろんな変わったマシンがどんどん導入されていきますけど、
基本はフィットネスなので
簡単なストレッチを組み合わせたものを一緒にやっていきましょう」

夢からさめたような
沢山さんの声。
マンツーマンで私はエクササイズを
いくつか教えてもらった。

今はやりの骨盤矯正と、体のコアを鍛えるとかいって
背骨編、足編と合計3つを受けた。

「こちらに通うようになりましても、
このエクササイズは必ず家でもやってほしいんですね。
毎日ジムに通われる、ということでしたら構いませんが
通常毎日難しいと思われまますので
ジムに来れない日は家でスティックにやってくださいね」

また沢山さんはにっこりほほ笑む。

えっ・・・家で・・・するんですか。。家でできないからきたのに・・・

私の表情を読み取ったのか沢山さん。

「ダイエットと学問には王道ないんですよ」

ガーン！！

結局自分の地道な努力か・・・

なんだかジムにさえ通ってれば大丈夫、という

どこか他力本願的な気持ちでいた

私は

後ろ頭を思いっきりハリセンで殴られた気がした。

その瞬間

葉本さんの存在はすっかり記憶のかなたに消えていた。

そう・・・

ジムを出て

再び偶然会うまでは・・・

一緒に帰った

暖かいジムの中とは違って、
外に出ると
一気に冷気が襲ってくる。

ジムの中は
最適な温度環境。
湿度まで管理されていて、
発汗作用を促すことができる湿度に設定されているらしく、
何もしなくても汗ばんでくるくらいだった。

うわ・・・なんだかお風呂上がりの湯ざめ気分。
風邪ひかなきゃいいけど・・・

私はマフラーをきつくしばり、
毛糸の帽子を目深にかぶり、
耳あてまではめて完全防備。

「すっかり冬装束ですね。
今日は一段と冷えますね」
さりげなく声がかかった。

葉本氏！！
私は目がまんまるになった。

やたっ！！
私のこと・・・覚えててくれたんだ・・・

胸が高鳴る。
これは。。
チャンスあるかも～

なんのチャンスだ、私。
高校生じゃあるまいし。
いさめるもう一人の私。

「今日は、体験でこられたんですか？」

「そ、そうなんです。。あ、あの・・
私のこと・・覚えていてくださってたんですか？」

「あー覚えてますよ。社内のパソコン講座に来られてた方ですよ。ね。
私はハタケヤマさんの補佐でちょっとしたお手伝いをしてるだけで
あまり深い知識はないんですけどね」

私はこのチャンスに名前をキチンと聞かないと・・と
思い心の中であせった。

どうやってそんなこと聞こう。

しかし、気がついたら見切り発車の私だった。

「あの。お名前・・キチンと伺いたいんですけど。。
実は・・名札を拝見させてもらったんですけど、
ハモトさんなのか、ヨウモトさんなのか・・と
思いました。。」

「ハモトですよ。ハモトアキツグ」

アキツグだということまで
自らカミングアウトしてくださって聞く手間が省けて助かった。
アキツグさんか・・
アキツグアキツグアキツグ・・

私は頭の中でアキツグという名前が
連なってぐるぐる回った。

それらのアキツグメリーゴーランドが
回りすぎて

ちびくろさんぼのトラのように
アキツグバターができるのではないかというくらい
アキツグが回った。

あ、でもちびくろさんぼって
絶版になったんだよな～・・・

今の子供たち、ちびくろさんぼ読めなくなってかわいそう～
私が手作り紙芝居オバサン興行行こうかな・・・

ついつい
自分の世界に浸ってしまった。

「どうしました？西山さん」
ヨウモトさんがそんな私をいぶかってか、
話しかけてくれた。
あ。。すみません。ついつい・・・なんでもありません。。
アキツグさんって変わったお名前だな～・・・と
思いまして。。

どうやら変な女だと思われたようだ。

また会いたい

「あ・私・私は西山といいます。

西山かりん。あの・

夏の鈴って書いてかりんって読むんです」

あわてて私も自己紹介した。

「かりんさんですか。可愛い名前ですね」

アキツグ氏はほほ笑みながらそういった。

か、かわいい・って。。名前だけじゃなくて
私のこと、かわいって思ってくれたらいいのに。

と、厚かましくも、そう思った。

ま、思うのは勝手だから許せ。

「あの・私、夏に生まれたんですよ。。

7月4日が誕生日なんです。

あ、宣伝してるわけじゃないんで！

あの・『7月4日に生まれて』というトムクルーズの映画あったじゃないですか・
偶然なんですけどね。

私トムクルーズ好きなんですよ。あの・私オトコマエの人好きなんです」

と、思わず間接的に早くも告白してしまった。

しまった！気づかれたか・？

「あ～そうなんですか・

トムクルーズ。僕もその映画DVDで観ましたよ。

DVD集めるの好きなんでね」

「そうですか～！！よかった・

男の人ってDVD集めるの好きですよね」

いけない・ついまたしゃべりすぎてしまった。

気に障ってしまったらどうか？

しかし、アキツグ氏はそんな様子はみじんもみせることなく、
「たくさんありますよ～もう100本以上あるかな。
いつもカミサンに怒られてるんですけどね」

カミサン・・・カミサンか・・・

自分も夫がいるのに、
葉本さんに奥さんがいることを
確認させられてなぜだかショックを受ける。

「あ、もう駅ですね・・・
僕こっちなんで」

葉本さんと私はお互い別方向だった。
どこの駅までなのか・・・
そこまではさすがに立ち入って聞けなかった。

「じゃあ、また・・・
クラブ、入るんですか？」
「あ・・・あの・・・今日きたばかりで・・・
まだ決めかねているんですけど」
「またお会いできる日を楽しみにしていますよ」

またお会いできる日を・・・
またお会いできる日を。

また私は「またお会いできる日を」という
言葉のテープが連なって
脳内でぐるぐるまわりはじめた。
今度はちびくろさんぼまで登場して
一緒に黄色い傘をもって
まわりはじめた。

その言葉はただの社交辞令なのか、

まさか個人的な気持ちで・・・？

そんなことはない。

そんなことはないだろうが、

もし気持ちがあるならば、うれしいような、

でも初対面の女にそう軽々しくいう男だったら

それはそれでずいぶん軽薄な気もする。

そんな人じゃない、と私は葉本さんを勝手に美化していた。

ややこしいな、私。

世界中で一番自分が好き

家に帰るとダンナはまだ帰っていなかった。

「はぁ～こんな時間から夕食の準備するのもおっくうだな～」

ともうすぐ9時になる時計を見上げながら思った。

一人ならば、簡単に済ませるのに・・・

かばんから携帯を出すと点滅ランプに気がついた。

「急な接待になった。夕食はいらない」

旦那からだった。

あ～よかった・・・ほっとした。

一人だったらもうお茶漬けでもいいし～

せっかく今日トレーニングしてきたんだし、この時間だから

下手に食べたら消費カロリーがもとのもくあみ。。

ポットのお湯を急須にいれ

おちゃわんにお茶を注ぐ。

お茶は最高級の宇治玉露。

ダンナがお茶には好みを譲らず、

ぜいたくしてる。

そんなお茶でお茶漬けするなんて

もったいない気分もするが、仕方ない。

「あ～そんなことより・・・ジムの入会・・・どうしよう・・・」

お茶漬けすすりながら考える。

今後も会社ではなかなか

会えるチャンスはなさそうだし、

ジムに入れば確実に会える。

しかし、そんなこと動機が不純じゃないか？

でも、いつだって

物事はきっかけはなんだっていい。

大仰な理由で何かを始める人って

いるだろうか。

みんな何かの自己愛から

はじめてる。

そう・・・自己愛。

私は愛されたいんだ。。

世界中で一番好きな自分を

世界中で一番愛してくれる人を求めている。

自分の本当の気持ち

私は何を悩んでるのか。
ジムに入会したところで続けられるかどうか？
でも、葉本さんがいる、ってわかったら
続けられるんじゃない？
いや、でもただそれだと不純な動機だから
もし続けられずやめてしまったら
根気のないヤツだと、
嫌われたらどうしよう。。
でも、そんなことになったら嫌だから、
頑張る！という
考えもあるし。。

それに、心の支えになったら
絶対続けられるよ。
っで、うまくいけば・・・と
新展開を私は望んでるのだろうか？
でも、何にもなかったら？
それもさみしい。
でも、何か事が起こったら？
そんなこといいの？
それを私は本当に望んでるのだろうか？・・・

と、何も起こってないうちからあれこれ
考える私。
本来の主旨に戻ろう。
そうだ、私の目的はダイエット！
それを達成するためなんだからっ！！

私は自分の本当の気持ちにふたをしようとした。

翌日会社帰り、
私は自分の気持ちが変わらないうちに、
とっとと早めに・・・と
さっそくジムに寄って入会手続きをした。

私のモットーは行動力！！と
昨日の夜まで散々悩んでいたくせに
勝手に自分を鼓舞できるこのしたたかさ。

「入会手続きですね～」と
今日の受付担当のおねいさんは、
またこの間とは違う人。
でも、どうしてスポーツクラブのおねいさんたちって
こうも若くてきれいで筋肉質なんだろう。
そりゃ～鍛えてるからだろう。
私もこうなれるかな？

今日は入会手続きだけだから、
中には入らない。
葉本さんがきてるかどうかも・・・わからない。
チケット制だからいつきてもいいけど、
いつくるかわからないんだし。。
・・・ということは？
ハタと気がついた。
入会しても葉本さんに会えるかどうかはわからない？
またここで昨日は考えもしなかった難関にぶつかった。
・・・あ、違うんだった。

純粹に私はダイエット目的で入会したんだった。
葉本さんと会ったからって
どうなるわけでもなし。

また私は襟を正す気分で
自分を制した。
とりあえず、入会した翌日から
チケット使えるみたいなので、
明日これそうだったらこようかな。

ダンナに話したら
あっけなく
いいんじゃない、って
まるで私のやることには
何も興味がないようで。

もしかして
俺もやるよ、なんていわれたらどうしよう～・・・と
考えなくもなかったけど、
ま、あのシトがそうゆうことやるとはとても思えなかったけども、
こうまで無関心とは。

たんぱく質な女

むきだしになった
筋肉のついた両腕。

ひきしまった腹筋。

「入会したんですか？」

葉本さんが気軽に声をかけてきてくれた。

そ、そ・・・そうなんです・・・

形から入る私は

真新しいフィットネススーツに身を包み、
そんな姿を
葉本さんに見られることが恥ずかしかった。

「今度、一緒に釣りに行きませんか？」

えっ・・・？釣り？なんで？

釣りといえば、男の人は楽しいけども、
女は横でなんにもすることがなく、
ひたすらつままない、
好きな人の横にいれる幸せ・・・なんてゆうのとは
程遠い、生臭いだけの
レジャー。

でも、せっかくのはじめてのお誘いなのに・・・

「海釣りですよ」

海釣り？

気がついたらマグロ漁船に乗り込んでいた。

えーっ！！なんで・・・？

松方弘樹か？

振り返ると葉本さんがニヤニヤ笑っていた。
後ろから羽交い締め（はがいじめ）にされた。
えっ・・・葉本さん・・・どうして・・・？

なんで・・・？

・・・目が覚めた。
悪夢だ。
隣でダンナがスースー寝息をたてて寝ている。

今夜も夫婦の営みはなかったな・・・

もう、何カ月だろ。。
そんなだから
こんな悪夢見るんだよ。

私別にインランでもなんでもない。
ごくごくノーマルな女だと思ってたのに。
それどころか、
たんぱく質だと
思っていたのに。。

ちょっとだけよ

ちょっと誘ってみようかな。・・・

私は触手を伸ばしてみた。

うう～ん・・・と寝返り打ち始めた。

気がついてるのか、いないのか。

ちょこっと乳首の周りを指先で
一周半。そっとなぞってやった。

先端もすりすり。

さわってやった。

無反応・・・

下半身も・・・

ちょっと下着の上から失礼・・・

むぎゅ。

やっぱ無反応。

拒否反応？

浮気でもしてんのかしら～？

そんなに疲れてるとは思えないし～

無防備に枕元に携帯おいてる。

ちょっと見てやろうか。

あ、イケナイイケナイ。

携帯見ることから

夫婦の亀裂は始まるらしいから。

ケイタイは男のロマン。

宮根さんも言ってたね。

そっとしておいてやろう。

でもまあ、
以前の浮気の発覚は
おせっかいな知り合いがわざわざ
「ただならぬ雰囲気と一緒に歩いていた」と
吹き込んでくれた。
あの頃は私もピュアだったな～
白黒はっきりつけないと気が済まなかったし、
まさか、とおもっていたのでスッキリさせたかったばかりに
追及したらあっさり認められてしまった。
心はズタズタになった。
知りたくなかった事実。
知らない幸せ。
知ってしまった不幸。

どっちが本当に不幸で
どっちが本当に幸せなのだろうか。

そして、そのことがきっかけで
私はすっかり拒否ってしまった。
しかし、その後私は一応回復したそぶりを見せ、
赤ちゃんがほしかったこともあって、
再び夫婦生活に挑んだが、今度はこっちがフラれた。

ほんと、うまくいかないよね～

夫婦って。

恐れているものは何

そんなこんなで少しずつ、
少しずつ歯車がかみあわなくなっていった。
その後思い出したようにポロップポロップと夫婦生活はあったのだが、
あまりに子どもがほしいという気持ちが
強すぎて
愛情なのか、子どものためなのかわからなくなってきてしまい、
基礎体温つけて
メールで今日はその日だから、なんて
連絡したり、
そんな私にダンナも嫌気がさしたのか、他に理由があるのか、
わからないが
だんだんフェードアウト。
もう、この数年はすっかりごぶさたとなってしまった。

まあ、子どもだけが人生なわけじゃないし
子どもがいない夫婦のほうが結束感強くて
気味悪いくらい仲良かったりするけども、
うちはそんなんでもないしな～・・・

では、なんで夫婦続けてるんだろ？

そして肝心のところに
突っ込み入れて真剣に話し合わないのはどうしてなんだろ？

私は何を恐れてるんだろう？
何を失うのを怖がってるんだろう？

もし・・・もし・・・
葉本さんと夫婦だったらどうなんだろ？

いやいや。。
私は葉本さんのこと、まだ何にも知らないんだから。
勝手に自分の都合のいいように美化してるだけ。
私は自分に言い聞かせた。

翌日今度こそ本当にジムに行ってみた。

今度は夢ではない。

松方弘樹もいない。

でも、葉本さんも、いない。

受付でロッカーのカギを受け取ると

トレーナーの沢本さんがやってきた。

「決心したのね。えらいわ～。

では、私が考えた最適なメニューです」

といって全マシンの行程が書かれてあるカードを渡してくれた。

えっ・・・これ、全部・・・するんですか？

私は軽くめまいがした。

そうですよお～夏鈴さん、シェイプアップ目的なので、

最初はウォームアップしてから。筋トレで

無酸素運動してからその後有酸素運動に

かえていきます。

短い時間で、ならしていく感じで。

もうちょっとやりたいかな～くらいで次に行く感じで

すすめていってください。

私はひたすらストイックに

やりはじめた。

全てをふりきって

忘れるかのように。

終わったら汗びっしょり。

シャワーでも浴びようか。

しっ・・・かし、スポーツジムってその辺のスパよりも

充実してるね～

ジャグジーだって各種とりそろえております。
大衆浴場なんかと
大きく違うところは
女たちが裸一貫、堂々と隠すところも隠さず、
おおっぴらに歩いているところ。

どうしてなんだろう？
おふろ、じゃなくて
スポーツの延長だから？
なんとなく大胆になるのだろうか。
集団グラビア撮影の待合のように
裸の女たちがウジャウジャいて
それはそれで圧巻である。

翌朝。さっそく筋肉痛である。

すぐに体に出るのはまだ若いというが、
本当にそうだろうか。

「なるべく間をあけずにきてくださいね」
とジムでも言われたが、はたして今日行けるだろうか。
しかし、ここでくじけては・・・！！

夕方、仕事帰りの体にむち打って
ジムへと足を運んだ。

すると・・・今日はいた。
葉本氏。私は目を疑った。ベンチプレスで
汗をにじませている。

私は軽く会釈をした。
葉本氏も目だけのあいさつである。
でも、私をわかってくれている。
なんだかめくばせだけのあいさつって
二人だけの秘密みたいでときめく。
って、勝手に自分で盛り上がってる。

トレーニング中は余計な話はできないし、
そんな余裕もない。
なんだかつまらない気もするけど、
ま、仕方ないか。
帰りは会えるかしら・・・
まるで高校生に戻ったような気分の私。
スポーツクラブを出ると
耳がちぎれそうなくらいの寒風が吹きすさんでいた。
しかも、葉本氏もいない。
まだやってるんだろっか。

そんなに毎回会えるなんてうまくいくわけないよね。

ホームで縮こまりながら電車を待つ。

ふと反対側のホームを見ると

葉本氏が笑顔でこちらを見ていた。

えっ・・・思わず笑顔でまた会釈。

目線が合うって

恋の始まりじゃないのお～

って、私どこまでめでたいんだ。

家に帰っても余波はまだ続く。

つつい鼻歌歌いながら

キッチンに立つ。

「なんだか楽しそうだね～」

普段は寡黙な夫くんも、思わず声をかけてきた。

「ん。ちょっとね」

あ～いかん、いかん。

何か勘ぐられるか？

そこまで敏感じゃないとは思うけど。

でも、ダメだわ。

葉本さんのあとに夫くん見ると。。

つつい比べてしまう。

葉本氏のひきしまった体躯に比べ、

夫くんのぽちゃぽちゃ、ぷよぷよしたお腹。

今までそれほど気にもならなかったけども、

鍛えてる人間とそうでない人間で

これほど差があるなんて。

鍛えてる人間がえらいわけではないのに、

鍛えてない人間がえらくないようになってしまう。

いかんいかん。夫くんを見下すような態度をしてしまっては・・・

私は自分にブレーキをかけるよう努力した

女が浮気したらどうなんの。

結婚ってなんだろ、結婚生活ってなんだろ。

そんなことを改めて考える。

確かに恋愛だったから、

結婚したときは燃えていた。

燃えていた・・・としか今は言えない。

それは一体どこへいったのか。

燃えカスになってしまったのだろうか。

結婚がパートナーとともに人生を歩む、という

表現に変わっていったのはいつからだろうか。同じ方向を同じ歩幅と同じ速度で歩いて行けるならそれほど理想的なものはないだろう。

いつからすこしづつ

ボタンの掛け違いがおこってきたのだろう。

まっ、いいか・・・これくらい。

波風たてたくなくて、目をつぶってきたのがいけなかったのだろうか。

些細なことで争う必要もないだろうけど、

たとえば数年前に発覚した浮気。

もっと激しく追及すればよかった、と

今更ながら後悔。

追及することだけが

それだけあなたのことが好きなのよ、大事に思っているのよ、

という愛情表現とも

おもえないが、

でもやはり夫婦にとっては重要な問題だった。

それをいい奥さんぶりっこのように

わかったふりして流してしまった。

彼の言うことを100%信じてしまった。

「そんなつもりはなかった」

「夏鈴のことは今でも好きだよ」

男の人って下半身は別のイキモノらしい。

浮気だって

自転車に乗って溝にはまるようなものらしい。

でも、だからといって

そうなんだ、と

理解を示したふりをするって

結局自分で自分の今のぬるま湯的生活を壊したくなかったからじゃないの。

まあ、誰でも自分が一番大事かもしれないけど

そんなにまでして守りたい結婚生活って

いったいなんだろ。

あれからすっかりセックスレスにもなってしまう原因にもなったのに。

もし、私が浮気したら。

どうなるんだろ。

逆上されるのだろうか。

あっさり知らん顔されるのだろうか。

それは、どちらが愛情がより深いのだろうか。

お互い1ペナルティずつ、ということで

見逃してやろう、なんて

そんなゲームのようなことはありえない。

チャンスはやってきた！

そんなある日、
会社の慰安旅行の日程が決まった。
今年はグアムに3泊5日。
しかも・・・！
今年は、まるで自分の願いが届いたかのように
葉本さんのいる輸入部と私のいる経理部が
同時期になった。
これは、チャンス！
私は行程表を見ながら一人デスクの上で
ニヤニヤした。
このことを絶対葉本さんにも伝えたい！！
でも、いつどうやって
話そうか。。

その日のジムで私は
つつい葉本さんにばかり
視線を送ってしまっていた。
こんなに見つめてると絶対バレちゃう。
というか、バレてくれたほうがうれしくも
あるんだけど。

大体自分がだれかを好きになった時って
周囲にもバレてしまうんだよね。
それが
今までだとそれはそれでよかったんだけど、
今の既婚状態だと、
結構まずい。
でも、私葉本さんに伝えたいんだよね。
あ～葛藤だわ。

私って結構やるな～と
久々自分で思った。
思わぬところで
思わぬ行動力が出るもんだ。

いつも葉本さんは私より長くトレーニングしているので
たいてい私のほうが帰るのが早い。
ジムの帰りがけにあるカフェに立ち寄った。
このお店は駅への通り道にあるので、
窓際の席に座っていれば、
葉本さんの姿を発見することが出来るはずだ。
どれくらいの時間になるだろう。
あまりにも遅かったり、見逃してしまったら、それはそれで仕方ない。
時計を見ながら、待つ。
携帯ゲームをいじりながら
3秒に1回くらい外を見た。

・ ・ あ！葉本さん！
まぎれもなく黒のコートを羽織った葉本氏発見！
私はあわててお会計をして外に出た。

はあはあ息を切らして葉本さんのそばに駆け寄る。

「あの・ ・ 葉本さん・ ・ 」
びっくりしたように葉本さんが振り返る。
「どうしたの？今、終わったの？」
「いえ・ ・ あの・ ・ 待ってたんです」
正直に私は伝えた。

「あの・ ・ 慰安旅行・ ・ 葉本さんの部署と同じ日程になったので、
それだけ・ ・ 伝えたくて・ ・ 」
まだ息が上がるのが抑えられず、とぎれとぎれに話す私。
「あ～そうなんだ・ ・ 」
にっこりほほ笑む葉本氏。

その笑顔は・ ・ 私の息切れしながら走ってきたことに対する
容認の笑顔なのか、
同じ日程の旅行でうれしいなの笑顔なのか。
多分、前者だろうが。

とにもかくにも、伝えられてうれしい。

男の人に何かを伝えたくて待ち伏せするなんて、
こんなことができる自分だったとは自分で驚きである。
人生初めて。

勢いづいた怖いもの知らずの私は、
ものはついでだと

気がついたら葉本氏のメールアドレスまで聞いてしまっていた。
葉本さんもあっさり教えてくれて拍子抜けした。

これから秘密の恋が始まるのだろうか？

女子高校生気分

私にこんな積極行動する力があつたなんて、本当に驚き。
でも自分からメルアド聞くような既婚女のことを
葉本さん、なんて思っただろう。
ていうか私のことまさか独身とは思ってないでしょうね・・・？
まさか私、独身に見えないだろうな～？
てか、独身に見えてほしいんだろうか。
それは、なぜ。若く見えてほしいのか。
うまくいけば独身ぶりっこして、そのまま葉本さんとつきあいたいなんて
おもってるんだろうか。
でも、この12年にも及ぶ長い生活の疲れは嫌でも
端々から漂って、とてごまかしきれないだろうとは思うが。。

家に帰って携帯見つめる私。
さっそくメール送ろうか。
でも、教えてもらった当日にすぐ送るなんて
いかにも、ものほしげな様子でどうだろう。
でも、そんなくだらないこと考えずに無邪気にストレートに
思いをぶつけるほうが、
可愛くないか？

とりあえず、おやすみメールだけでも
送っておこう。

TO. 葉本さん。
今日はいきなり待ち伏せしておいかけてりして
ごめんなさい。
びっくりしたでしょう。
また明日ジムに行きますか？
私も行こうと思ってます。
では、おやすみなさい。。
from・夏鈴

絵文字いれようかどうしようか
ちょっと迷ったけどやめておいた。
男の人って絵文字嫌いらしいし、
それにいきなり1通目のメールで絵文字ふんだんに盛り込まれては

きっとひくだろう。

送信後即削除した。

ダンナが私の携帯見るとはとても思えないけど、
念のため。

葉本氏からの返信はこなかった。

メールの返信待つ時の気持ちって
こんなにヤキモキするんだろうか。

恋のドキドキトレイン

朝起きると携帯の点滅ランプが
ピコピコしていた。
あわてて携帯をひらく。

葉本さんだ！

西山さん。
おはようございます。メールありがとう。
ジムから帰ると心地よい疲労感で
お風呂からあがるとすぐに
ベッドに入ってしまう、朝メールに気がつきました。
今日も私はジムに行きますよ。
西山さんも行かれますか？

待っています。

待っています、待っています。。

またこんな意味深な言葉を書いてくれて～
もう、気がもむじゃないのさ～

でも、
ただ何気にも書いていただけなのか。
深読みさせようとして書いてくれたのか。

多分前者だろう。
また前者か～
いつも前者だよな～
葉本さんって。
後者になってほしーよ。

あ～でも、
ケイタイってときめくね。

私もほんと、今の高校生たちがうらやまし～

みんな、こんなやりとりして
恋の一步手前のギリギリドキドキ感を
味わってるんだろうか？
私も平成の女子高校生になってみたい～

「早く終業時間にならないかな。。」
さりげなく周りに気づかれないよう時計を見る私。

早くジムに行って
葉本さんに会いたい。
はやる気持ちをおさえる。

「今日は新しいメニュートレーニングを
考えましたよ」
いきなりトレーナーさんの沢本さんから
声をかけられた。
えっ・・・？
「西山さん、
体重ダウンがゆるやかなので、
もう少し今の時期は、
きつめのトレーニングで負荷をかけましょう」

えっ・・・？
そうだった・・・
私の本来の目的を忘れていた。
なんだか体重の増減なんてどうでもよくなりつつあって、
ただ葉本さんに会える場所として
ジムの存在がある、と
勘違いするところだった。

いかん、いかん。
高い月謝も払っていることだし。
モトとらなきゃ～ね。

必死で汗を流す私。

ふと葉本氏が横をさりげなく通り過ぎる。
一陣のさわやかな風が吹き抜けたように。
葉本スマイルを残して。
でもでも、秘密の恋。

だけど、駅で待ってる間、もう我慢できない。

『T O。葉本さん。
私、今駅ですが、まだジムでがんばっておられますか？』メールする。

次の電車でこなかったら、遅くなるからもう乗ろう。

あと2分・・・
1分・・・

「今、駅についたよ」
メールが届いた。

あ～でも電車きちゃったよ。
仕方なく乗る。
ドアの窓越しに
息を切らしながら走ってくる
葉本氏の姿が見えた。
軽く手を振ってくれている。
私もさりげなく返す。
もう、なんだか
○●気分。

メールはデート？

家に帰っても、なんだか楽しい気分は続く。
そういえば、もうすぐ慰安旅行。
この件を夫くんに伝えなければ。

夕食時さっそく伝えると
「ふう〜ん・・・」と気のない返事。
ま、いつものことだけでも。

「ご飯とか大丈夫？」
「大丈夫だよ、一週間やそこら。いつものことだし」
あ、そうですか。。

あまりにそっけない返事にちょっと肩すかしをくらったような。
けど

「さみしい、さみしいよお〜」とか
「メシどうすんだよ」なんて
泣きつかれても困るけども。。

夜、なんとなく携帯さわっていると
どうしてもメールしたくなる。

TO。葉本さん。

もうすぐ慰安旅行ですね。
葉本さんのこと、はもっちゃんって、
呼んでいいですか？

思いつきで、はもっちゃん。って
呼びたくなってつい書いてしまった。

すぐに返事がきた。

TO。西山さん。

いいですよ。

では、僕はなんて呼ばせてもらいましょう？

かりんちゃんでもいいですか。

かりんちゃんなんて・・・

いまや、親戚のおばさんくらいしか、

そんな風に呼んでくれないよ。

TO。はもっちゃん

ぜひ、お願いします。

なんだか急に接近したような、

特別な関係になったような気分がした。

チラとダンナを見ると

テレビに夢中だった。

私はせっかく届いたメールを消すのがもったいなくて

暗証番号でカギをかけた。

それでも好きな気持ちは止められない

夜、一人ベッドの上で考えた。

私はダンナに秘密にしてるつもりだけど、
本当はもう何かカンづかれてるんじゃないかと。

夫クンと私は、もうすでに夫婦の領域を出て、
いわば兄妹のような関係になってしまっている。

それに、長い間生活をともにしてるのだから、
ちょっとした相手の微妙な変化や空気感の違いみたいなものは
伝わってるんじゃないか。

私はそんな兄のような存在に対して
「手のひらで転がしてる」みたいな気分になってたけど、
悔ってはいけない。

実は
手のひらで転がしてるつもりで
実は21世紀のあやつり人形のように
遠くから遠隔操作でもされてるんじゃないか。
全て見透かされてるんじゃないか、という
気持ちがしてきた。

きっと
「しょうがねーなー。ヤンチャな妹は・・・。」くらいに
思われてて、
ちょっととりあえず、様子見て見守っててやろうか。
くらいに
思われてるんじゃないか。
そんな不安がしてきた。
そして、そんなばくぜんとした
不安というものも
たいてい当たるものであることにも
私は気づいていた。

新しい下着の意味は

慰安旅行の日が近づいてきた。

私はいそいそと水着を買ったり、

新しい洋服買ったり

なぜか新しい下着を買ったりして、

その日を待ち望んだ。

どうして、旅行に行くとなると新しい下着を買うのか、これは私の長年の疑問でもある。

思い起こせば、きっと小学校の修学旅行から

その歴史ははじまったのではあるまいか。

旅行に行くのだから新しい下着をもっていかないと、と

親が買いそろえてくれた思い出がある。

いつしか自分も旅行に行くときは

新しい下着だ、という思い込みがインプットされ

いつもいつも旅行のたびに新しい下着を買うようになった。

でも、今回の下着購入はまた何か一味違う意味がある予感がする。

ただ自分のためだけ、同僚にちょこっと自慢したいだけのための下着ではない、何か特別な特殊な意味があるような気がする。

それが何なのか。

それを想像するだけで

何かワクワクする。

反面、もしかして

そこから地獄の入口に突入するような

気持ちもする。

慰安旅行先のグアムでは
思った以上に楽しめた。

まずは税関で笑った。
本当に中川家のネタがそのままとびでてきたような
人がいた。

「サイトシーイング？」
「イエーイエース」
「スリーディズ？」
「ノー。フォーディーズ～」
といったところ、

「スリーディズ！！」
机をバン！と叩いて
怒られた。
どうやら違うようだ。
あっ。そうか・・・現地ではスリーディズだから？
「あ～オーケーオーケースリースリー」
と3本指をたてる。

周りもくすくす笑ってる。

やっと終わった・・・

しかし、現地では
アトランティス号にのって
探検したり、
なんとアクティビティではしらじらしく
はもっちゃんと一緒に行動できたりした。

できたりした・・・というのは
的確な表現ではなく、
こちらから
誘導してはめてやった。
というところである。

なんだか開放的な南国の気分ですっかり
舞い上がり
人目も気にせず、堂々と行動している自分がいた。

帰りの飛行機の中は
少し肌寒かった。

私はC Aさんに
ひざかけを貸していただけないかと
お願いした。

キレ長の目が印象的な
天海祐希のようなその方は
「おひとつでよろしいですか？」
と聞いてこられた。

えっ・・・いちまいで・・・いいです。

そうなのだ。

私は、ナント
はもっちゃんと偶然隣り合わせの
席になったのだ。
きっと隠しても隠しきれない
いちゃいちゃオーラが
発光してたのだろうか。

なるべくそんな浮ついたところは見せないように
冷静さを装っていたつもりなのだが。。

そうはいつでも
ひざかけが到着したとたん、
そのひざかけを
二人のひざにかかるようにのせ、
その下で
私たちはこっそり手をつないだりした。

もう、こっそりなんて
そんなことしても
周囲にはバレバレかもしれないけど。

みんな気づかないフリしてくれてるのか、
本当に興味がないのか。

新聞読んだり、
スクリーンの映像みたり、
寝たふりしてるのか、本当に寝てるのか。

私は幸せだった。

私たち、といってもいいかも。

なぜか、まったく気にならない。
なんといわれてもいい、と
開き直ったような気持ち。

でももし聞かれたら・・・？

「友達ですよ」と
ゲーノー人のように
どこまでもシラを切ろう。

友達、友達。
いい言葉。

男女間に友情は絶対ありえない。と
そんな持論をふりまいてたのに。
このトシで
友達だって。
よく言うよ～

恋と愛との境界線は

『私って悪いことしてるのかな。
結婚してて、こんなことって
イケナイこと？フツーはありえないこと？』

でも、そんなことを考えながらも
はためには、あっけらかんとして見えただろう。

だって、はもっちゃんのこと
好きなんだもん。
好きな気持ちは止められない。

好きだという気持ち自体は悪いことではない。
結婚してるから
恋愛がダメなだけ。
どうしてダメなんだろ。

ジャニーズのヲタやったり
韓流スターの追っかけやったり、
そんなことだったら
全く構わないんだろうけど、
だけどそれが現実の身近な人に
移行しただけで
それだけでダメだなんて、
なんかおかしくない？

私は誰にも迷惑かけてない。

そう、
私は誰にも迷惑かけてない。

心の中でつぶやいた途端、
確信に変わった。

以前ダンナが浮気したときも
知らない間は私は幸せだった。

知ってしまったから不幸になった。

今、私のダンナは何にも知らないんだから
知らないままでいるうちは
幸せなんだ。

だけど、ずるいのかな、こうゆう考え方。

好きなんだったらキチンと
別れてからつきあうべき？

私はダンナのことは
嫌いではない。
嫌いじゃないって否定形なのは
好きではない、ってこと。
でも、深い部分で愛がある。
人はそれを情じゃないか、というけれど
ちょっと違う。
情だけでやはり毎日の生活は築けない。

でも、はもっちゃんに対しては・・・？
好きだという気持ちだけで、
愛してるとはまだいえない。

ダンナには愛。
はもっちゃんには恋。

手のひらに書いたキス

ひざかけの下でそっとつないだ手と手。
ほんのりあたたかく、
はもっちゃんのハートが伝わってくる。
時々カップルつなぎのように
からめたり、
そっとはずして
指で手のひらの上にくるくる円を描いたりした。
そんなことしてたら、
ふと手のひらに落書きしたくなって、
ハモトサン。と
カタカナで書いてみた。

ん・・・？

葉本さんが私のほうをみて
何？というような顔をして見た。

「なんて書いたと思う・・・？」
小声で聞いてみた。
首をかしげてる。
もう一度ゆっくり書いてみた。
そしてカタカナだよ。と伝えると、

OKサインで答えてくれた。

うれしくなって私はずい
「ス・・・キ・・・」と
またカタカナで書いた。

はもっちゃんも
口の動きだけで

スキ・・・？と
答えてくれた。

うん・・・とうなずく私。

今度は
その言葉を逆にしてみた。

キ・・・ス・・・

はもっちゃんが
イの形の唇とウの形の唇で答えてくれた。
その唇に私は近づきたくなった。

ホテルへの道

空港についたらタクシー乗り場で
待ってる。

そんな走り書きのメモをもらったのは
着陸寸前の機内の中。

えっ・・・これって、、
どうゆう・・・？

驚きを隠せない私に
ただうなずくだけの
はもっちゃん。

どうしよう・・・
そうゆうことって
ありえるのかな。
私、そうゆうこと
アリ・・・？
今更ながら自問自答する私。

タクシー乗り場・・・
タクシー乗り場ってどこだろ。

何かに導かれるように
トランク引きずりながら歩く。

ほんの少しのためらいを載せて歩く。

タクシー乗り場。
あった。
はもっちゃんが軽く手を挙げた。
二人のトランクを積み込む。
はもっちゃんが告げた。

「リッチモンドホテル」

えっ・・・

想像してたけど

現実になるとやはり驚きとためらい。

でも、一日早く帰ってきてるから

明日の帰りになっても何も怪しまれない。

タクシーの後部シートに深く体をしずめながら

今度は堂々と

二人しっかりと手をつないだ。

しびれるキス

誘われたように見せかけてるけど、
自分からすべて伏線はって誘ってたんだよね、私。

恋に落ちた、とか
なんかかっこいいこといってるけど
全て自分に仕向けられるよう、
周りかためたりスキをみせたり。。
そうゆうことしないと
ガードが堅ければ
恋なんてできない。

私、恋したかったんだ。

そんな気持ちがきっと相手にも伝わった。

部屋に入って
ドアを閉めた途端、
はもっちゃんが
もう待てないとキスしようとしてきた。

彼のキスは優しい優しいキスだった。
上唇を小鳥がついばむように
右側の口角から優しく触れるか触れないかのキス。
上唇に
5か所。
下唇も同じように口角から
今度は下唇に向かって5か所。

もう少し触れてほしいと思うくらいの
風が吹き抜けていくようなキス。

じれったくて
もっとしてほしいと思っても、
わざとしてくれない。
唇から
首筋へ・・・

……
そして胸へ……

やっとまた唇に戻ってきてくれた。

私のことを本当に好きなんだな、って
思わせてくれるキス。
私のことを本当に大切に思ってくれてるってことが
伝わってくるキス。

女の子は
本当はキスがとても好き。
相手の愛情がそこで
わかるから。

そんな大切なキスを
もう何年おざなりにしてきたらう。

キスといえば
セックスへの通り道でしかなかった
この数年。

こんなに純粹にキスが
楽しめるなんて、
こんなにキスってきもちがいいものだななんて
こんなに
キスが女の子に戻れるものだななんて……

後頭部がジンジンしびれてきた。
そんな私をわかってくれてるかのように
葉本さんは
優しく後頭部を支えて揉んでくれた。

トントントン……
ノックされた。
ボーイさんが

スーツケースを
持ってきてくれたようだ。

夜は何度でも

あわてて唇を離し、
私は洗面所に駆けて入る。

葉本さんが
スーツケースを受け取っている様子が伝わってくる。

何かご用件がありましたら
お申し付けくださいませ。
ボーイさんの
声が聞こえる。

はもっちゃんが洗面所に入ってきた。

後ろから手をまわしてきて
首筋にキス。

キャミソールの
ストラップが床に落ちた。

乳房があらわになった
自分の姿が鏡に映し出された。

そっと下から持ち上げられる。

「こっち向いて・・・」
振り向きざま
今度は濃厚なキス。

はもっちゃんの体からは
南国の潮の香りがかすかに漂ってきた。
それに混じって、
ほんのりラルフローレンの香り。

このにおい・・・

そう・・・

高校生だったあの夏の日を思い出した。

初めてボーイフレンドと海へ行って

そのまま浜辺で・・・。

あの時と同じ香り。

あの時も、海の香りとラルフローレンが混ざっていた。

私・・・

このにおい好きだったんだ。

「腹筋ってほんとに

むっつに割れるんだね」

はもっちゃんの腹筋のラインを

指でなぞりながら

つぶやく。

「毎日鍛えてるからね・・・」

優しく頭をなでてくれる。

その手がだんだん下にのびてきて

おへその周りを

旋回する。

「もう…ダメだよ・・・」

その日、

夜は何度も訪れた。

オトコの胃袋に入る口紅

朝になったら
葉本さんとお別れ。

朝食後再び部屋に戻って
化粧をなおす。

そんな私に再び口づけてきた
葉本さん。

葉本さんって
ほんとキスが上手。

きっと何人もの人と
つきあってきたんだらうな～・・・

「ねえ～
はもっちゃんって
今まで何人くらいの人とキスした？」

つついなんでもストレートに聞いてしまう私。

「かりんがはじめてだよ」

はじめてだって・・・
そんなことを
大真面目な顔で言える葉本さんって
やっぱり一枚も二枚も上手だ。
モテる男の条件だね。

しかも、
「かりん」だなんて。。

一夜にして
呼び捨てされる関係になってしまった。。

はもっちゃんが私のあごに

指を添えて上向かせた。

再び熱いキスを交わす。

あ〜今塗った口紅とれちゃう・・・

快感に酔いしれながらも

頭の一部ではそんなさめた部分も

持ち合わせてるなんて。

キスが終わったら口紅塗りなおさなくちゃ・・・

でも、

日本中で、

世界中で毎日のように量産されてる

口紅たちの何万分の一が、

こうしてオトコの胃袋の中に

きっと飲み込まれていってる。

キスが終わったら

オバQのように

唇の周りに口紅が広がっていた。

燃えるバラ

家に戻って
そっと鏡を見る。

さっきまで葉本さんとキスしていた唇。
数時間前まで触れられていた体躯。

もう私は以前の私ではなくなってしまった。

体の中に何か燃える芯のようなものが
できあがってしまった。



今夜夫が帰ってきたらどんなふうに対応しよう。
自然に自然に・・・と

思ってもどこか何か
違和感がでてしまうんじゃないか。。

何か勘付かれないだろうか。

そんなにきっと敏感じゃないだろうから
今日は大丈夫だとしても、
今後どうしよう。

私はダンナあてに
買って来た
ネクタイを手にとってみた。

でも、その目はネクタイが
画像として目に映ってるだけで、
実際はその向こうを見つめていた。

ネクタイのもっとはるか向こうの先にあるものに
想いを馳せた。

私はグアムで買った葉本さんと
おそろいのシルバーのリングに

チェーンを通して

首にかけた

首筋にシルバーが冷たい。

そっと息をふきかけ熱くしてほしかった。

自由な恋愛の行きつく先は

気持ちの中では不安や葛藤と闘いながら、
でも、それでも
私はウキウキする気分を隠しきれない。
恋の始まりってやっぱり楽しい。

会社に行ったら、
もう一部では私と葉本さんのことが
噂になってるようだ。

あれだけ
イチャイチャ、べったりしてたんだから
仕方ない。。
それに噂ってあつというまに
広まるんだし。

きっと実際よりも大きく広まってしまってるんだろうな。。

そんなことも
どこか人ごとのように思えてしまう私って
どこまでお気楽なんだろう。

もう、なるようになる、って
思ってるのか。
それとも
いざってときは
覚悟できてるのだろうか。

私はただ自分に正直に生きたいだけ。

好きな人は好きなんだし、
そのこと自体は悪いことでもなんでもない。

結婚したら
もう一生恋したらダメ、なんてことない。

結婚前より結婚後のほうが

人生長い人のほうが多いんだから

そんなに長い間

たった一人の人を

わきめもふらず、愛し続ける。なんて

そんなことができる人、

きっと男も女もいるわけない。

ホテルで会ってホテルで別れ

そんな
悩みともいえない悩みを
抱えながらもそれでも
私と葉本さんは
逢瀬を重ねていた。

今までは
結婚しててどうやってみんなつきあってるんだろう？
どんな顔して家にかえってきてるんだろう？なんて
考えてたけど
結構できるもの。
というか、
全然平気なものなんだな。っておもった。

それに不思議だけど
一人になるといろいろ考えて罪悪感もったりもするけども、

はもっちゃんと会ってるときは
そんなことまったく考えない。

二人で会ってると楽しいし、
時間だってあつというまに
過ぎちゃう。

時間があつという間に過ぎるって・・・
中学生のデートじゃないんだから、
私たちはいつもホテルなんだから
あつというまに過ぎるのは
あたりまえっちゃー当たり前。

私と、はもっちゃんはすごい
いい相性だ、っていうことが
最近わかってきた。

深く付き合った人って

.....
そんなに多くないから
比べるとか
そういうことできないけど、

体の相性なんてない、っっておもってたけど
やっぱりあるんだ・・・と
実感してる。

肉体の門の入り口

ジムには
変わらずキチンと通ってるけども、
つつい葉本さんに目がいってしまう。

そこで彼の筋肉質の体からピキピキという
音が漏れ聞こえるんじゃないかというくらい
血管が浮き出てるのを見ると
私の血液も逆流する。
私って血管フェチだったんだ。。と
気がついた。

もう、その時点から
前戯ははじまっていることにも気がついた。
ジムが終わったら、
もう早くはもっちゃんと
二人になりたくてなりたくて。

でも時間がないから駆け込みホテルで
30分とか。

本当、愛の魔力ってすごいな、なんて
酔いしれてるけど
実際は肉欲に負けてるだけじゃないの、と
もう一人の私が言う。

女って精神的なつながりをもとめるものだ、って
おもってたけど
そうでもない。
愛がなくてもセックスできるとまでは
言わないけど
それは男の人の特権みたいなものに置いておいてあげよう。
私は今まで
キチンと深い愛情が確認されて
自分自身で納得しないと
最後まではいかない、と
どこか自分で決めてた。

簡単に許したらもったいない、とか
軽い女だと思われたくない、とか
思ってたけど
こんな風に
人から見るとあっさり関係もっちゃうなんて。
男からすると都合がよくって
ありがたい女なんだろうか。
私はあとから
愛情が湧いてくることもあるんだな～って
思う。



それでもいいんじゃないの。どっちが先でも。

またもう一人の私が言う。

背信行為は一体誰に？

その日の夜。

なぜだかダンナが求めてきた。

もう何か月ぶりだろう。

というか、

ずっと私からばかりだったので、

ダンナからのお誘いというと

何年ぶり、といってもいいのでは。

なんで私が求めてるときはきてくれなくて

今頃になって・・・？

何かムシの知らせ？とまで

勘ぐってしまう。。

でも

脳裏に消し去っても消し去っても

葉本氏の影が浮かんできた。

あるときは鮮明に、

あるときは稲妻のように。

どうしても比べてしまっ集中できなかった。

そんな私を何かおかしい、と

疑われないだろうか。

見透かされないだろうか。。と

内心焦った。

でも、久しぶりだから・・・ということ

きっとそれらは免罪符になってるだろう。

女ってその時の精神状態によって

すごい左右されるイキモノなんだな～・・・て

思う。

そして。。

ダンナとは未完で終わってしまった。

私の中で

なぜか葉本氏に対して

罪悪感が湧いてきたのはなぜ。

本当はダンナに対して裏切ってるといわれても仕方がない状況なのに。

妊娠した

葉本氏とは 週1回くらいのペースで会うようになった。

数ヶ月が経過したある日 妊娠したことが発覚した。

予期していたことではあった。

葉本さんと こんな関係が続けていたら

いつか赤ちゃんができるかもしれない。

その時はどうするのか。

覚悟はしているのか。

自問自答することもあった。



私はオトコとオンナの関係は

どんな間柄であっても

フィフティーフィフティーだと思っている。

葉本さんとこうなったのも

自ら望んだことであった。自分からワナをしかけて

誘っていったようなものだが、

もし仕掛けられたとしても 最終的には

自分の責任なのだ。

私は 今まで葉本氏に結婚を迫ったことも ましてや 離婚を迫ったこともない。

また自分自身も離婚したいと 思っているわけではない。

では何故付き合っているのか。

遊びなのかと聞かれれば

それは違う。気持ちは真剣なのだ。

これは 女友達に話しても理解してもらえず、

かえって反発をまねくだけなので

ごく親しい友人にしか本音を漏らしてはいない。

しかしその友人とて私の気持ちをただ聞き流してくれているだけで、容認してくれているわけではない。

もし、今回の妊娠のことを話したらきっと

「責任とってもらいなよ」と言われるに違いない。

しかし責任って一体何なのだろう。

自分の身に起こったことは全て自分の責任だという姿勢がオトナとして潔くはないか。

そんなに肩肘張っていいカッコしなくてもいいのではないか。

という考えもあるだろう。でも

自分の妊娠にオトコに責任とってもらうって

「何を」「どう」することが責任なのか。

それに責任ってコトバ命をもった赤ちゃんに貼り付けるのはあまりにおこがましくないか。

命をもつ…生まれてくる可能性のあるその重い生命を私はどうしようとしているのか。

葉本氏には事実を伝えた。

殴ってほしい

葉本さんに妊娠したことを告げる。

「・・・そうか。」

一言だけ言葉が返ってきた。

その間、わずか2.3秒くらいだろうか。

私はその数秒間の間に全てを読み取った。

「一人で病院行って心細かったらろう？」

そんな優しいコトバも耳に届かない。

「二人の子供だから、一緒に力を合わせて

頑張って育てていこう」

がんばって・・・ガンバッテ・・・

ってどういう意味？

はもっちゃんは離婚しないんだよね。

私も離婚する気なんてない。

もしも、もしも・・・

お互い離婚したとして、

そして二人で新しい家庭を作って、

この新しい生命をはぐくんでいくことができたら・・・

そうしたら

幸せな家庭が築けるのだろうか？



ダンナに言わなくちゃ・・・

でもなんて言おう。

どこから話しをするべきか。

逡巡しているうち、夜がやってきた。

「あのね・・・私・・・赤ちゃんができたの・・・」

「えっ・・・?!」

ダンナの顔は一瞬にして蒼白になり、それっきり
コトバがなかった。

夜布団にはいり、
お互いなかなか寝付けなかった。
二人とも天井を見上げていた。
おもむろに主人が口を開いた。

「俺は・・・わが子ではない赤ちゃんを産む女と
一緒に暮らせない」

「ん・・・わかってる・・・」

そういうのが精いっぱいだった。

「かりんは・・・もちろん産むんだろ？」

「うん・・・」

産んでも産まなくても、
もうダンナと一緒に暮らせないと思った。

いっそ殴ってほしかった。

終焉の時

妊娠したのでジムはやめることになった。
必然的に葉本さんに会える機会も
減った。

でも、私はこれをきっかけに
葉本氏とは距離を置こうと決心していた。



最後に会った
ベッドのあとで。

「私、認知してもらおうなんて思っていないから。
会社も辞めて、一人で暮らそうと思ってるから」

と宣言した。

葉本氏は声もなくただ驚いている。

「認知は・・・しようと思ってるよ。
というか、最低限それだけはさせてほしい。
それに、経済的な面もできるだけ援助させてほしい」

「認知したら奥さんにバレるよ。」

はもっちゃんの家のごことは一切聞いてないし
こちらからも聞いたことがない。
奥さんが薄々でも気づいているのかどうか、
子どもはいるのか、いれば何歳なのか。

そんなことも聞いてはいない。

でも、はもっちゃんが家庭を大事にしていることは
私はわかっている。

そんなはもっちゃんだから

私は好きになったのだ。

では、そんな好きな人となら一緒になりたい、と

思うのが自然なのではないか。

結婚を望んでないのは本当に好きではなかったのではないか。

と

思われるだろうが、

やはりそうではない。

どんなに愛し合っても

いつか愛には終わりがくる。

私はそれがコワイ。

それなら

今、はもっちゃんのことを

まだ好きな気持ちのまま、

ここで終わりたいのである。

恨んだりさげすんだりしたくない。

私は子どもが欲しかった。

その子どもを授かれたということで

この恋愛は意味のあることだったと

自分で思えるのである。

最後の優しさ

翌日

「認知はする。認知した後、転籍という形をとれば、
認知した事実は新しい本籍にはいかないらしい」

と

葉本氏が私に告げた。

「でも・・・パスポートを取ることが
今後あるでしょう。その時本籍を変えたことが
いやでもわかってしまうよ」

結局奥さんに全く知られずに認知する方法はない。
はもっちゃんはコトバを飲みこんでいる。

「いいよ・・・もう。

最初っからそれは望んでなかったし。」

「じゃあ。。じゃあ・・・出来る限りの経済的な援助はさせてほしい」

はもっちゃんのごく普通のサラリーマン。

奥さんに知られずに自分の出来る範囲の気持ちだけの援助はしてくれるという。

その気持ちだけでいい。

「さようなら・・・はもっちゃん」

私は別れを告げた。



家では荷づくりを始めた。

実家の近くにアパートを借りて住もうと思う。

ダンナが話しかけてきた。

「かりん・・・話があるんだ・・・」

顔をあげると真剣なまなざしのダンナの顔がそこにあった。

「かりんが産む子供には間違いないんだから・・・

二人で一緒に育てよう」

そっと抱きしめてくれた。

私は涙が出た。

張り詰めていたものが

キレてゆるゆると解き放たれた。

うれしい。うれしかった。

でも、それは経済的なものへの依存だけなのではないか。

一人で育てていくことへの不安。

その不安がなくなったことへの安心ではないのか。

そんな安心に簡単に身をゆだねて甘えていいのだろうか。

不倫というのは

女の相当な覚悟と経済的な自立が必要だった。

一人で生きていく

私は一人で生きていく。

道ならぬ恋の代償として、
なんてそんなセンチメンタルに浸ってるわけでもないが
自分の愛した人の子どもを
愛してない人と一緒に育てるわけにはいかない。

愛してない人はかつては確かに愛した人だった。
最後の最後まで離婚届に
判を押すことをためらってくれるくらい
私のことを思ってくれたのか、
ただ不憫だと思われたのか。
心情はどちらなのかはわからない。



不倫って本当に不思議。
もしこれが
肉体関係のない
プラトニックなものだったなら、どうだったのだろう。
いい大人がそんなことありえないと
信じてもらえないだろうか。
肉体関係はなかったのだから

許してもらえるのだろうか。

許されるのだろうか。

では、まったく愛情はないが
体だけの関係であったならば

遊びだった、で

済ませられるのか。

私はこれから産まれてくる子どもと

二人で生きていく。

また恋愛をするのだろうか。

また性懲りもなく恋をするのだろうか。

恋はこりるのだろうか。

きっとまた恋をするだろう。

その時は気持ちを抑えられるのだろうか。



はもっちゃんに

そっくりな赤ちゃんが産まれた。

彼の名前を一字とって

秋憲と命名した。

e n d

オトコ前な人が好き

<http://p.booklog.jp/book/44881>

著者：キャンディやぶこ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/pinky77/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44881>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44881>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.